

原 著

青春期甲状腺腫に関する研究

(第 一 報)

(昭和28年9月21日受付)

信州大学医学部丸田外科教室

布施為松 宮崎嘉雄 柏崎純一 太田庄司
柳沢資高 大野幸彦 徐先渭

Studies on the Adolescent Struma (Report 1)

Department of Surgery, Faculty of Medicine, Shinshu University.

(Director : Prof. K. Maruta)

Tamematsu Fu-e, Yoshio Miyazaki, Junichi Kashiwazaki, Shyozzi Ōta,
Mototaka Yanagisawa, Yukihiko Ōno and Senji Jo.

An investigation was carried out on the adolescent struma in 1228 subjects such as school-girls and factory girls in Matsumoto City and in a certain town 40 km. north of Matsumoto.

The investigation was made especially on the degree of enlargement, frequency, age distribution, correlation with menstruation and influence of environment.

As a result of our investigation we found the cases of adolescent struma in 35.8% out of 1228 subjects and some close relation between adolescent struma and menstrual cycle.

緒 言

青春期甲状腺腫とは主として青春期の個体特に女性に稀ならず認められる甲状腺の腫脹であつて、臨牀的には彌蔓性甲状腺腫の像を示し、病的症状を全く缺如し、個体の生活状況によつて容易にその機能従つてその容積を変動し、青春期を經過すれば自然に消失するのを特長とするものであるから、一面に於ては又青春期に於ける各種内分泌臓器の極めて旺盛な機能状態を伺う指標とも見做し得るものであろう。然しながら果して之は単に青春期の旺盛な生活機能乃至各種内分泌機能に対応してその機能乃至容積を変動する甲状腺の腫脹に過ぎないものであろうか。些細の誘因によつて容易に甲状腺機能異常状態に移行すべき性格はないであらうか。

余等は之等の問題を追求すべく、その第一段階として松本地方並にその北方40軒の某町に於ける女学生並に女子工員合計1228名に就て調査した成績のうち今回はその第一報として青春期甲状腺腫の出現率、環境による影響、年令の分布、腫脹の程度、月経との関係等に就て報告する。

調 査 方 法

甲状腺は正常な状態に於ては触知し得ないものが大多数であるが、触知し得るものを第Ⅰ度(触知可能)とし、疑わしい場合は仰臥位をとらせて肩胛部に枕を

入れて精査した。腫脹を認め得るものを第Ⅱ度(認識可能)、一見して腫脹の明かなものを第Ⅲ度(明白)とした。

月経周期に就ては月経中、月経後期、間歇期、月経前期とし、更に無月経の群を設けた。月経前期、月経後期は約7日間としたが、調査の対象となつた年令層に於ては特に不順な例が多く、かゝる分類も比較的のものである。

調 査 成 績

1) 被検者の年令的關係と甲状腺腫脹の程度並にその頻度との關係は第一表の如くで、青春期女性の何れの年令層にも略同様の頻度に認められる。

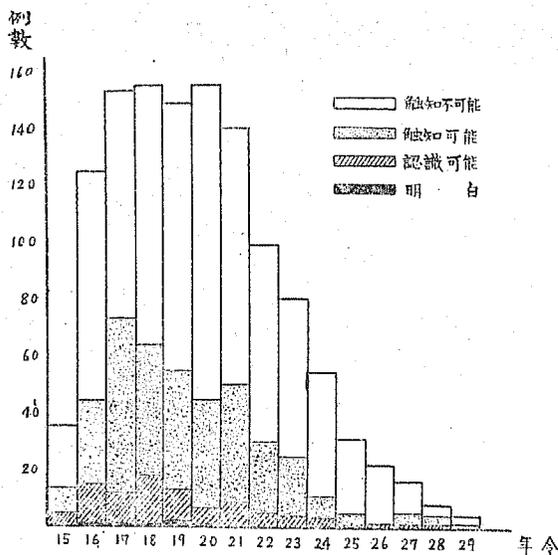
2) 甲状腺腫脹の程度は第Ⅰ度 346例(28.1%)、第Ⅱ度88例(7.2%)、第Ⅲ度6例(0.5%)である。第Ⅰ度及び第Ⅱ度は15~24才の年令層に多く見られるが、第Ⅲ度は16~20才の年令層に濃縮して見られる。各年令層に就き甲状腺腫脹の程度並にその頻度を判り易く図示すれば第一図の如くである。

3) 甲状腺腫は松本市内調査例に於ては第二表の如く月経後期、間歇期、月経前期、無月経の各群の順序に減少し、月経中の群に於ては之等より更に少い。余等は此の点に疑念を抱き爾後の調査に於ては月経周期に特に注意し、個別的に詳細に訊問した結果は第三表の如くである。即ち甲状腺腫は月経中の群に於て著明

第一表

年齢	調査数	触知可能 (第Ⅰ度)	認識可能 (第Ⅱ度)	明白 (第Ⅲ度)	甲状腺腫の出現頻度
15	36	9	4	0	13
16	125	29	14	1	44
17	153	61	11	1	73
18	156	46	17	1	64
19	148	42	11	2	55
20	155	38	6	1	45
21	140	41	9	0	50
22	98	30	5	0	35
23	80	21	4	0	25
24	54	8	3	0	11
25	31	6	0	0	6
26	22	4	2	0	6
27	17	5	1	0	6
28	8	4	1	0	5
29	5	2	0	0	2
計	1228	346	88	6	440
%		28.1	7.2	0.5	35.8

第一図



に多く見られ、月経後期、間歇期、月経前期の順序に減少し、無月経群では間歇期群と略同率に認められる。即ち月経時を頂点とし略第二図の如く波状に増減するものと如くである。

4) 女学生群と女子工員群との間には明白な相違は認められない様である。

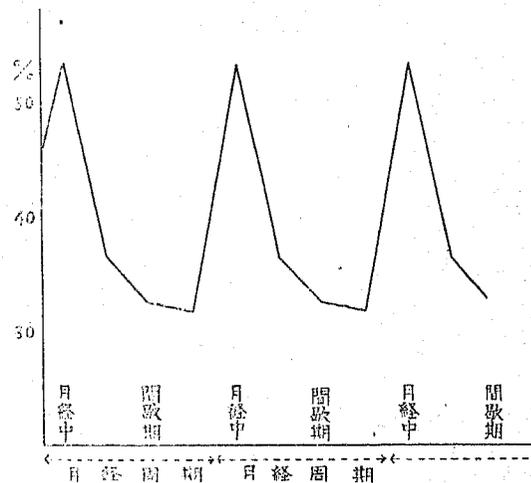
第二表

月経周期	月経中	月経後期	間歇期	月経前期	無月経	計
触知可能	16	29	117	39	1	202
認識可能	2	10	37	8	3	60
明白	0	0	5	0	1	6
触知不可能	52	63	263	89	10	477
計	70	102	422	136	15	745
%	25.7	38.2	37.7	34.6	33.8	36.0

第三表

月経周期	月経中	月経後期	間歇期	月経前期	無月経	計
触知可能	29	19	59	25	12	144
認識可能	4	0	10	7	7	28
明白	0	0	0	0	0	0
触知不可能	29	33	143	69	37	311
計	62	52	212	101	56	483
%	53.2	36.5	32.5	21.7	33.9	35.6

第二図



考 按

甲状腺腫の分類はその立脚点により一様でない。青春期甲状腺腫と云ふ言葉も広義には青春期に認められる甲状腺腫を広く包含すると解釈して差支えはないであろうが、余等はこゝに於ては狭義に解して、主として青春期の個体特に女性に稀ならず認められる甲状腺の

瀰漫性腫脹で病的症状を缺如するものを青春期甲状腺腫と見做した。従つて青春期甲状腺腫は青春期の個体の生活機能と密接な関係があるものであるから、主として個体の生活する土地環境と密接な関係があると見做すべき地方病性甲状腺腫とは區別せらるべきものと考へている。尙亦結節性甲状腺腫は之から除外する事にしてゐる。アメリカに於ける甲状腺腫研究会①の見解も大略この様である。然し乍ら七条等②の様に青春期甲状腺腫の中に学童甲状腺腫をも含めて一般に群馬県地方に於ては他地方に比して甲状腺腫が多いと云ふ事から青春期甲状腺腫をも地方病性甲状腺腫の範疇に入れて取扱つてゐる学者もある。

野田③は非甲状腺地域である奉天の女学生 726例に就て Dieterle に従つて調査した結果 26.9%に甲状腺腫を認め、中原、山田④は岡山県作州地方の女学生 825例に就て同様な方法で調査した結果 27.7%に之を認めたと報告しているが、勝又、村上⑤は岐阜県下 13地方に於ける 13—26才の女学生及び女工 2434例に就て調査し、最も多い地方では甲状腺腫は 66.9%の高率に認められるが月経との間には原因的関係を見出し得なかつたと報告している。勝又、村上の場合は特に高率を示しているが其他の報告並に余等の調査成績から青春期甲状腺腫は凡そ 30%前後に見られるものと考えられる。

Weidemann⑥は甲状腺は周期的にその容積を變動する事を認め、腫脹は月経前期より始まり月経第一日に極度に達すると云ひ、Maurer⑦、Scheringer⑧は月経周期により血中沃度量に變動のある事を明かにし、中村⑨によれば甲状腺は性周期により著明なる組織学的変化を呈すると云う。余等の成績によれば甲状腺腫の出現頻度は月経時に著明に増加し月経後期、間歇期、月経前期に至るにつれて次第に減少する周期性を示している事が明かである。これは女性に於ける青春期甲状腺腫の調査に當つては常に願ふべき重要な事実と云ふべきである。青春期甲状腺腫が男性に比較して女性に著しく多く認められ且月経周期と密接な関係を有すること、甲状腺機能亢進乃至異常状態が男性に比して女性に遙かに多く見られ、而も青春期或は更年期等の女性の性機能の転換期に発症し易い事等は既に明かにされた事実である。一つの内分泌腺に変化が起ればこれに対応して他の内分泌腺にも二次的に変化が生ずる事は容易に理解し得る事であるが、甲状腺は就中女性の性機能と極めて深い関連性があるものの如くである。

青春期甲状腺腫は既に述べた様に病的症状を全く缺如し所謂 Euthyroidism に属するもので月経中には凡そ 1/2 に、間歇期には凡そ 1/3 に之を認める。換言すれば内分泌機能の極めて旺盛な青春期に於ても 1/2 乃至 1/3 に

於ては甲状腺の腫脹を認めないと云ひ得る訳である。同様な状態にあり乍ら或るものには之を認め或るものには之を認めないのは如何なる理由に因るものであろうか。果して之等甲状腺腫の凡てが青春期を經過すると共に消失するであらうか。些細の誘因によつて容易に甲状腺機能亢進状態乃至異常状態に移行すべき性格はないであらうか。余等は調査時には単なる青春期甲状腺腫と見做され、何等の病的症状を示さなかつた 25才の女性が数ヶ月後には甲状腺中毒症状を主訴として来訪した一例を経験している。これは極めて示唆に富む症例であつて今後の研究に俟つべき問題である。

総 括

余等は女学生並に女子工員合計 1228例に就て甲状腺腫の出現頻度、腫脹の程度、年令的分布、環境による影響、月経との関係等に就て調査した。出現頻度、腫脹の程度、年令的分布等に関する成績に就ては従来の報告に比較して特筆すべきものは認められない。又女学生群と女子工員群との成績の比較に関する限りに於ては環境による差違は認められない。然し乍ら月経との関係に於ては興味深い成績が得られた。

青春期甲状腺腫は單に青春期の旺盛な生活機能乃至各種内分泌機能に対応してその機能乃至容積を變動する甲状腺の腫脹に過ぎないものであるか否か。些細の誘因によつて容易に甲状腺機能異常状態に移行すべき性格はないであらうか。これ等に関する回答は今後の研究に俟ち度いと思ふ。

参 考 文 献

- ① H. Selye : Textbook of Endocrinology, 1950, Montreal, Canada.
- ② 七条, 田中, 斎藤, 長谷川, 妹尾 : 日本内科学会雑誌, 40, 234, 昭26.
- ③ 野田 : 実験消化機病学, 16, 150, 昭16.
- ④ 中原, 山田 : 実験医学雑誌, 13, 700, 昭4.
- ⑤ 勝又, 村上 : J. med. Sciences, 7, 59, 昭8.
- ⑥ M. Weidemann : Zeitschr. f. Geb. u. Gyn., 80, 419, 1918.
- ⑦ Maurer : Arch. f. Gyn., 130, 70, 1927.
- ⑧ Scheringer : Arch. f. Gyn. 134, 319, 1930.
- ⑨ 中村 : 近畿婦人科学会雑誌, 15, 1131, 昭7.